

## 五

「都内近郊の散策は、西洋の影響から、明治に入って、永井荷風あたりが始めた」という論者がいる。たしか作家の大佛次郎の説だったと記憶している。評論家の川本二郎氏も、この説をつぐ。しかし、「むしろ荷風などは鷗外の史伝物などを通して知った江戸文人の<sup>ひそみ</sup> <sup>なら</sup>鑿みに倣った部分もある」<sup>62</sup>。そうだろう、荷風永井壮吉は、亜米利加・巴里などよりも、わが江戸を愛していた。ぜんたい、荷風散人の江戸に関する著述（あるいは思い入れ）が、亜米利加・巴里のそれより上まわるから、そうだろうと言うのである。散人の江戸漢詩に対する傾倒は、中国文学者の奥野信太郎（橋本左内の子孫）などが舌をまくほどだった。

ここでまた、前出の『郊外散策の流行』にもどろう。著者の田中道雄氏によると、江戸後期に流行した「郊行漢詩」の特色は、以下の三つにあるという。

第一に、馬や輿によらず、自らの足による歩行に喜びを見出すこと。

第二に、飲食を記すこと。

第三に、夕日をめでること。

では、いままで鑑賞してきた「金沢道中」は、どうであろうか？

まず「経過窈窕又崎嶇」という難儀な山行をしつつ、いたるところの「野趣村情」を満喫しているのだから、第一の条件は満たしている。申し分ないだろう。

さらに「煮香菌、斫鮮鱸」というふうには、いまが旬のシイタケやスズキを食したのだから、第二の条件も満たしている。これもまた申し分ないだろう。

ただ、第三の条件「夕日をめでること」においては失格である。もし見晴らしのきく能見堂から、金沢の海に没する雄大な落日を詠じる一聯があつたら、この詩は「郊行漢詩」そのもの……いや、そういう範疇をこえてスケールの大きな吟詠となったであろう。

それにしても、肝心かなめの尾聯が、「頼是同遊有工画、蕭閑写得六賢図。」というのでは、漢詩としてはやや高揚感に欠けるうらみがある。どうも散文的な結末で感心しない。だいいち、詩句が説明的にすぎる。落句をいそいだ付けたりのような感がいなめず、<sup>せんじん</sup> 千仞の功を一<sup>いつき</sup> <sup>か</sup>簣に虧いたようで、佳什清唱とは言いがたいのである<sup>63</sup>。こういうところが、いわゆる「日本漢詩」の弱みだろうか？ そうだとしても、中国の詩人にも困難だとされる七言律詩という詩形をもちいて、いうところの「郊行漢詩」を作ってみせたのは評価にあたいしよう。

これはあくまでも推測の域を出ないが、おそらくこの郊行は、旧暦の八月十五日前後におこなわれたものではなかったろうか。というのも、頃もよし、仲秋の名月の物日だからである。江戸の人びとが四季おりおりの節句に郊遊したことは、前出の渡辺京二氏の著作に書かれているとおりで、一年を歳時記的なリズムで生きていた彼らが、年にいちどの「月の盛り」を見るために、郊外に出かけないわけがない。古来、十五夜の観月には、農耕儀礼にともなう宗教的な意味合いがあつた。まして淡斎や詩仏は多情の詩人、時をたがえて名月を詠みそびれるようでは詩人の名折れであろう。もし一行が秋郊に遊ぶとしたら、この仲秋を慮外においたとは考えにくい。

もしかしたら一行は、心越禅師の吟詠で名高い「瀬戸の秋月」をのぞむため、いまかいまかと「盛りの

月」の出を能見堂でまちつづけたかもしれない。

青瀬涓涓不繫舟 青瀬 涓涓<sup>けんけん</sup>として 舟を繫がず  
 風伝虚籟正中秋 風は虚籟<sup>きょさい</sup>を伝えて 正に中秋  
 広寒桂子香飄処 広寒の桂子 香り 飄<sup>ただよ</sup>う<sup>とき</sup>処  
 共看氷輪島際浮 共に見る 氷輪の島際に浮ぶを

これは心越禅師が元禄元年(1688)に賦した『金沢八景詩』八詠のうち、「瀬戸秋月」という一詠であるが、能見堂から出版された観光案内書『金沢八景案内子』<sup>64</sup>に収録されていたので、おそらく淡斎ら一行もこれを読んで感吟したにちがいない。

この詩はちょうど能見堂から見た仲秋の名月を詠んだものにはほかならず、のちに歌川広重の画想のヒントとなったのではないかと思われる。というのは、この詩の布局が、広重の世界的に有名な名画『武陽金沢八勝夜景』<sup>65</sup>(安政四年[1857]作)のそれと非常に似かよっているからである。思うに、禅師のこの詠をなくしては、広重の『八勝夜景』中の詩美は、どうていのぞめまい。ちょうど詩中の「氷輪 島際に浮ぶ」という主題が、布局彩色をおびて画中によみがえったとしか思われぬのである。

「風流は畢竟 何物為るか」と淡斎は自問する。しかし、この詩にいう「風流」とは、「花鳥風月」といったような、退嬰的なものでも消極的なものでもない。そのマンネリズムをこえて、「風流」というものをこの目で見きわめんとする積極性があった。淡斎たち一行は「月の盛り」を賞したであろうか。それとも、あいにくの天候で観月は断念するほかなかったのか。

前出の十方庵敬順によると、能見堂から瀬戸橋まで、わずか二十余町。あるいは一行は、二連の反り橋である瀬戸橋から名月をめぐるために、さきを急いだかもしれない。総宜楼における設宴吟詠も、風流韻事の一つとして捨てがたい。この宿屋は「瀬戸秋月」の勝地、つまり平潟湾の海沿いにあったので、観月の宴には理想的な場所どりであった。

この旅宿で淡斎の作った詩が、れいの「金沢総宜亭」の七律である。師の詩仏が「平淡にして趣あり」と推奨おくあたわざる一首で、文政五年(1822)には碑に刻せられ<sup>66</sup>、総宜楼の庭内に建てられるといった名吟である。淡斎の得意や思うべし。

その七十五年後(明治三十年[1897])、東屋庭内で淡斎の詩碑を見かけた伊藤博文が、感興のおもむくまま「金沢総宜亭」に次韻する詩を賦したことがある。「遊金沢、宿四時総宜楼、庭有大窪天民所建上毛佐波某詩碑、即用其韻」<sup>67</sup>という七律である。博文は明治漢詩の大家・森槐南を師として、政務繁忙のかたわら吟髭をひねるほどの韻士であり、なにかしら故人の淡斎に対して親和するところがあったから、幽明相隔てて応酬したわけである。

では、一代の風流人物・伊藤博文が次韻してみせた、佐波淡斎の「金沢総宜亭」とは、どんな詩であったか。それについては稿をあらためて、ていねいに論じたいと思う。なぜなら、この詩は連載形式をとる本稿の重要な眼目のひとつだからである。

【第2号正誤表】

147 頁 8 行目「右の跋」→「跋語」

149 頁 4 行目「二枚続き」→「四枚続き」

【付記一】

『佐波淡斎詩集』などの複写は、桐生市図書館の大瀬裕太氏のご好意によるものです。特にここに記して感謝の意を表します。

【付記二】

金沢八景に関する資料を閲覧するにあたって、今回も神奈川県立図書館の館員の方々のお世話になりました。特に森由紀氏に格段のご配慮を賜りました。特にここに記して感謝の意を表します。

【注】

<sup>1</sup>『逝きし世の面影』平凡社 2005 年。『江戸という幻影』弦書房 2004 年。渡辺京二氏は、物見遊山などを通して自然に親近する江戸人の奥ゆかしさを、これらの著述のなかでくりかえし述べている。

<sup>2</sup>董其昌撰『画禅室随筆』巻二「画訣」(八幡関太郎訳注『画禅室随筆』有春堂書店 昭和十三年 pp.173-174)

(なお中国、日本にかぎらず、漢詩漢文にもちいられた漢字は、特別なばあいでないかぎり、日本の現在通行の字体に改めた。以下同じ)

<sup>3</sup>渡辺京二著『江戸という幻影』弦書房 2004 年 p.141。村尾嘉陵著『江戸近郊道しるべ』平凡社 1985 年 pp.395-405。

<sup>4</sup>『幕末明治女百物語』(上) 岩波文庫 1997 年 p.52。

<sup>5</sup>『蕉風復興運動と蕪村』(岩波書店 2000 年 pp.67-101)所収

<sup>6</sup>宋詩が江戸漢詩にあたえた甚大な影響については、揖斐高著『江戸詩歌論』(汲古書院 1998 年 pp.306-316)を参照。これによると、寛政六年から文化十四年にかけて、宋代詩人の別集、総集の出版(和刻本)が二十二種におよぶという。これをもって、当時における宋詩偏重をうかがい知ることができる。

<sup>7</sup>出版地、出版者、出版年は不明ながら、『范石湖四時田園雜興詩』は早稲田大学古典籍総合データベースで見ることができる。これは汲古閣刊本の和刻本で、土岐善麿旧蔵の由。本詩集が少なくとも善麿の頃まで読まれていたことを思うと、感慨を禁じえない。また、同データベースでは、出版地不明、成趣園蔵板、享和二年跋の『田園雜興詩』が見ることができる。

これに加えて、清田黙校『范石湖四時田園雜興詩鈔』(清水氏蔵板 明治十二年)が、国立国会図書館デジタルコレクションによって見ることができる。この詩集の人気が、明治までおとろえなかったということの証左であろう。

<sup>8</sup>『左傳・襄公二十一年』「罪重於郊甸。無所伏竄」杜預注「郭外曰郊， 郊外曰甸」(竹内照夫『春秋左氏伝』集英社 昭和四十九年 pp.323-324) このように旧中国では都市と農村は截然と区画されていた。都市の四圍を堅牢に守る城壁が、それを可能にしたのである。

<sup>9</sup>『石湖詩集』巻二十七所収。注 7 に同じ。

<sup>10</sup>「淳熙丙午、沈疇少紓。復至石湖旧隱、野外即事、輒書一絶。歳終得六十篇。号四時田園雜興」注 7 に同じ。

<sup>11</sup>注 7 に同じ。

<sup>12</sup>佐波淡斎の別集をまとめたものに、以下の二種類がある。

①『佐波淡斎詩集』(桐生市図書館蔵)

## ②『淡斎詩集』(国立国会図書館鶯軒文庫蔵)

淡斎の別集というのは以下の如し。

初編(第一詩集)『淡斎百絶』、文化六年刊。山本北山と菊池五山の序、大窪詩仏の後序を付す。

二編(第二詩集)『淡斎百律』、文化十年刊。大窪詩仏・市河寛齋(市河米庵書)・菊池五山(中井董堂書)の序文を冠す。

三編(第三詩集)『菁莪堂集』、文化十二年刊。亀田鵬齋・大窪詩仏・菊池五山・柏木如亭の序を冠し、津久井雨亭・栗田逸齋の校定である。

如上のように、錚々たる江戸詩壇の詩伯たちの賛助をえて成立した立派な個人詩集で、こういう豪華本の出版が可能だったのは、豪商であった淡斎が費用を惜しまなかった結果であろう。早い話だが、自費出版だった可能性がある。

①②の相違についていうと、①は『淡斎百絶』『淡斎百律』『菁莪堂集』の三冊をおさめ、②は『淡斎百絶』『淡斎百律』の二冊をおさめるという点にある。『菁莪堂集』が天下の希書であるだけに、桐生市図書館蔵の①の存在は非常に価値がある。

なお、『淡斎百律』は国立国会図書館近代デジタルライブラリーでも見られる。こちらは明治二十七年に、子孫の佐波善六が出版した活字本であるが、長田彝画になる淡斎の肖像が巻頭を飾っているうえ、朝川善庵撰「桐生故詩人佐羽淡斎君墓記」がおさめられているので、淡斎の人となりを知るには重宝である。

<sup>13</sup>徐照(霊暉)、徐璣(霊淵)、翁卷(霊舒)、趙師秀(霊秀)の四人をいう。四人とも永嘉(浙江省)出身の詩人で、別名に「霊」の字を含むところから、こう呼ばれる。

<sup>14</sup>たとえば、吉川幸次郎著『宋詩概説』岩波書店 1962年 pp.225-227。

<sup>15</sup>佐羽南溪・山藤荷亭・下山松齋校定。大窪詩仏・斎藤天籟閣。亀田鵬齋序。地方の出版物であるが、中央の文人もこれに参画した。ここでは桐生市図書館蔵『宋四霊詩鈔』を参照した。

<sup>16</sup>周骨平著『妙々奇談』(『日本随筆大成』第三期第十一卷 吉川弘文館 昭和五十二年 p.367)所収。(ルビ省略、「・」を補った)。なお『詩語碎金』『宋詩語』は、江戸から昭和のはじめにかけて、作詩のアンチョコのように重宝がられた初心者向けの詩学書である。

<sup>17</sup>佐波淡斎は絹織物買次商を本業とする地方詩人にすぎなかったが、たとえば詩壇時評ともいべき『五山堂詩話』などに自詩を多数採録されたばかりか、『淡斎百絶』(文化六年刊)『淡斎百律』(文化十年刊)『菁莪堂集』(文化十二年刊)の別集を三冊も刊行している。江戸詩壇の大家である市河寛齋、大窪詩仏、菊池五山、柏木如亭にも、それぞれ『寛齋百絶』『詩仏百絶』『五山百絶』『如亭百絶』の刊行はあるものの、『百律』の刊行はない。彼らの弟子であった淡斎にだけ『淡斎百律』の刊行があるのは奇とすべきである。

<sup>18</sup>富士川英郎他編『詞華集日本漢詩』巻七(汲古書院 昭和五十八年 pp.69-140)所収。

<sup>19</sup>『今四家絶句』亀田鵬齋序(富士川英郎他編『詞華集日本漢詩』第十一巻 汲古書院 昭和五十九年 p.5)所収。

<sup>20</sup>池田四郎次郎編纂『日本詩話叢書』(第八巻 龍吟社 大正九年 pp.13-15)所収。

<sup>21</sup>柏木如亭著/揖斐高校注『詩本草』岩波書店 2006年。

<sup>22</sup>祇園南海撰『詩学逢原』巻之下(池田四郎次郎編纂『日本詩話叢書』第二巻 龍吟社 大正九年 p.32)所収。

<sup>23</sup>市河寛齋撰『陸詩考実』朋友書店 1996年。

<sup>24</sup>「舟中作」『劍南詩稿』巻四十一(佐久節編『漢詩大観』下巻 有明書房 昭和十一年 p.3320。なお『漢詩大観』は『陸放翁詩鈔』によっている)

<sup>25</sup>『誠齋集』巻二十六「下横山灘頭望金華山」四首の其二。「閉門覓句非詩法」という詩句は、北宋の黄庭堅撰『山谷集』巻七「病起荆江亭即事(十首の其八)」の「閉門覓句陳無己、対客揮毫秦少游」を意識したものだろう。

<sup>26</sup>『崑岡炎余』所収『北里歌』十一首の後に付した市河寛齋の後序。(斎田作楽編『吉原詞集成』太平書屋 平成五年 pp.72-73 所収) なお、『崑岡炎余』は『北里歌』補遺五首も収録する。

<sup>27</sup>斎田作楽編『吉原詞集成』太平書屋 平成五年 p.281。

<sup>28</sup>『詩聖堂詩話』(池田四郎次郎編纂『日本詩話叢書』龍吟社 大正十年 p.435)所収。

<sup>29</sup>斎田作楽編『吉原詞集成』太平書屋 平成五年 p.11。この寛齋自序は実名をふせて、「玄味居士識」

としてある。

<sup>30</sup>「其間説鬼説夢、亦真亦誕。然意存勸戒、不為風雅罪人、後先一指也」『二刻拍案驚奇』即空觀主人小引。(凌蒙初著『二刻拍案驚奇』上海古籍出版社 1983年 p.1)

<sup>31</sup>清水茂他校注『日本詩史 五山堂詩話』(岩波書店 1991年 p.364)所収

<sup>32</sup>揖斐高校注『詞本草』岩波書店 2006年 p.174,p.180。

<sup>33</sup>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第2号 pp.145-147に、東臯心越禅師の漢詩八詠を翻字しておいた。また、あわせて京極無生居士の和歌八首も翻字しておいた。

<sup>34</sup>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第2号 pp.148-149,p.156。

<sup>35</sup>周密撰『武林旧事』卷三 中華書局 2007年 p.71。(中国の簡体字は日本の現代通行の字体に改めた)

<sup>36</sup>J・ジェルネ著/栗本一男訳『中国近世の百万都市—モンゴル襲来前夜の杭州』平凡社 1990年 pp.21-62。これによると、臨安の人口が百万を超したのは、1275年のことだという。

<sup>37</sup>斎藤長秋編輯『江戸名所図会』巻之二「天璇之部」「瀬戸橋」「其二 旅亭東屋」(ちくま学芸文庫版『江戸名所図会2』1996年 pp.366-369)

<sup>38</sup>釈敬順著『十方庵遊覧雑記』第五編三冊「拾七 能見堂の勝景の詩」(江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書』巻の七[江戸叢書刊行会 大正五年]所収 p.201)

<sup>39</sup>釈敬順著『十方庵遊歴雑記』初編の上「五拾貳 能見堂擲筆山の元始」(江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書』巻の三[江戸叢書刊行会 大正五年]所収 p.116)

<sup>40</sup>郭熙撰『林泉高致』「山水訓」「塵囂韁鎖、此人情所常厭也」(古原宏伸著『画論』明德出版社 昭和四十八年 p.101-102 所収)

<sup>41</sup>注5に同じ。

<sup>42</sup>注12に同じ。

<sup>43</sup>この言葉は有名で、よく引用されるが、だれも出典を明らかにしていない。あるいは口碑にすぎないのかもしれない。

<sup>44</sup>注39に同じ。

<sup>45</sup>『広重武相名所旅絵日記』(鹿島研究出版会 昭和四十九年)原色図版五十六枚、原寸大複製。

<sup>46</sup>斎藤長秋編輯『江戸名所図会』巻之二「天璇之部」「能見堂」(ちくま学芸文庫版『江戸名所図会2』1996年 p.325)

<sup>47</sup>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第2号 2013年 pp.157-159。

<sup>48</sup>注12 同。『菁莪堂集』鵬齋序「桐生者上毛之一都会也。文綺緞繡出焉。商賈牙儉萃焉。繁饒富厚甲于閩東諸邑矣。余以辛酉歲游于其地。乃觀市井之熱鬧、肆塵之豊富、祠宇寺院之宏麗、被服飲食之奢靡、而意内驚絶甚恠之。然無闔郷有一個嗜文字者。余淹留間、以詩請謁者惟佐波淡齋一人而已。吾又甚恠之。其後淡齋通交于都下詩伯、詩道改轍、頓脱旧習焉。」

<sup>49</sup>『作詩志叢』。注20に同じ。

<sup>50</sup>渡辺崋山著『毛武遊記』(芳賀登編『崋山全集』第二卷 日本図書センター 1999年 pp83-92)所収によると、崋山は江戸→桐生間を二日で歩いている。

<sup>51</sup>揖斐高著『化政期詩人の地方と中央』(『江戸詩歌論』汲古書院 1998年 p.295 所収)参照。

<sup>52</sup>松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』(下)岩波書店 1990年 p.147

<sup>53</sup>「題谷隱蘭若三首其二」洪邁『万首唐人絶句』卷四十四所収。また『全唐詩』卷五百八十四 上海古籍出版社 1990年 p.1489。

<sup>54</sup>たとえば、陸游「村居初夏」四首の其四(『劍南詩稿』卷二十二所収)「故郷風物勝荆吳、流水青山無処無」また、楊万里「暮行田間」二首の其二(『誠齋集』卷四十一所収)「水滿平田無処無、一張雷紙雨中鋪」淡齋はあきらかに陸、楊二氏の詩から学んでいる。

<sup>55</sup>ちくま学芸文庫版『江戸名所図会2』 p.325。(ルビ略)

<sup>56</sup>注45に同じ。

<sup>57</sup>注39に同じ。

<sup>58</sup>早川光三郎著『蒙求』下 明治書院 昭和48年 pp.914-915。

<sup>59</sup>吉川幸次郎他編『漢語文典叢書』第一卷(汲古書院 昭和五十四年 p.205)所収。

---

<sup>60</sup>唐の岑参の七律「暮春虢州東亭送李司馬歸扶風別廬」『唐詩選(四)』(朝日新聞社 昭和五十三年 p.45-48)所収。

<sup>61</sup>「送思齊上人之宣城」『林和靖集』卷一。林和靖は西湖の孤山に隱棲し、梅を妻とし、鶴を子としたという。江戸時代に愛された詩人の一人である。

<sup>62</sup>池澤一郎著『江戸時代 田園漢詩選』農文協 2002年 p.70。

<sup>63</sup>この尾聯はつけたりのようである、つけたりではないかもしれない。おそらく「金沢道中」の七律は、喜田武清がかいた「六賢図」に、淡斎が題した「題画詩」ではなかったろうか。してみると、これはその場の即興として許容されよう。

<sup>64</sup>神奈川県立図書館蔵『金沢八景案内子』(天明甲辰秋七月擲筆山地藏院現住來仙再刻)所収。

<sup>65</sup>神奈川県立歴史博物館蔵。

<sup>66</sup>淡斎の詩を詩仏が書したもの。石工は広群鶴。

<sup>67</sup>伊藤博文撰『藤公詩存』博文館 明治四十三年 第二十八丁。